

おわりに

ここまでのまとめ

本書で示してきた内容を簡単にまとめたい。

日本の教育は「知識」と「経験」、どちらを重視するかで常に揺らいでいた。それが一九八〇年代の中教審の「学びの転換」以降、「生涯学習」を軸とした新しい展開を見せた。そして、近年『知識』と『経験』、両方をカバーするような教育が求められてきている。この背景には「知識基盤型社会」と呼ばれる、新しい時代の変化があった。

このような時代の要請に合わせて行われてきているのが「探究活動」であった。しかし、この探究活動には有力なモデルが不足しており、公教育の現場では手探りが続いている状況であり、なおかつその全容は不明なままであった。

本書の第一部での結論としては、「探究活動」を事実に基づいて真理を希求する運動としてモデル化した。この運動は「生きる」という点で学校教育、社会教育、キャリア教育の全体をカバーする「生涯学習ファーム」の根幹を担うものである。この運動は単なる技術論ではなく、それが生きるということに結びつくという点で倫理的なものであった。

本書の第二部では現状の「探究活動」を見るための「観点」を列挙した。この「観点」において複数の探究活動で差異が際立ったことから、これらの観点をを用いて収集した個々の実践を分析し分類すれば、現状の探究活動の全体像理解へと近づくと考えられるのである。

本書の第三部では第一部、第二部の内容と響かせあいながら、本書のもとになった展覧会の当初の目論見であった「海の学び」を、学校現場の担い手である教師と社会教育の担い手である博物館のメンバーで共作する試みを収録した。ここで開発されたプログラムは「海の学び」の固有性と一般的な学力への広がりの可能性を見せた。

本書では探究活動のモデル、そして、観点、開発事例をそれぞれ示すことが出来た。このような取り組みはかなりの短期間で行ったものであり、このようにまとめられるというのもブリコラージュ的な手法を用いたため可能であった。ここで示されたことをもとに京都大学総合博物館の学びの取り組みは深化していくのである。

大野の「探究モデル」

ところで、本書がタイトルとする「学びの海」とはいったい何だったのであろうか。そして、そこへの船出は何を意味するのか。この点について少し考えてみたいと思う。

ある一枚のパネルに目を移す。

特別展の展示を締めくくったのは大野の「探究モデル」パネルであった。そこにはこの特別展のために全国調査を行った、京都大学で長年、研究と教育実践に携わり、館長としての激務の中でも小中高校にアウトリーチ活動に勤しむ大野独自の学習モデルと、探究活動に対する考えが示されている。

子ども達に論理的思考能力や対話力をつけ、有能感を与え、全人的な「生きる力」を育む「探究活動」。そのためには、観察力や発表力、聴く・話す力などの涵養が重要で、複数の科目の教員間の連携が不可欠です。また、探究の課題には地域に根ざしたものも多く、学校と地元の協力も不可欠です。今回紹介した「探究活動」の、成果の背景には、連携や協力を紡ぐための関係者の多大な努力を読み取ることできるものが多くあり、「探究活動」の深化には、学校教員間、あるいは学校と地域の間での連携・協力が不可欠だということを強く再認識させられます。大海原を順風満帆に航海する船も、装備や糧食の補給なしにはあり得ません。今、私たち大人に課せられた役割は、学びの海へ船出した子ども達を支えるための連携・協力の仕組みを市民全体の力で構築することではないでしょうか。私たちの「生きる力」を、次世を「生かす力」にする、を課題に、私たち自身も真摯な「探究活動」をしようではありませんか。

大野の言う「論理的思考能力」は事実在即した真理を語るため力、「探究の力」である。「対話力」は真理を語り合う仲間を作る能力であり、「有能感」は情緒的な「探究愛」と呼ばれるものである。大野はこのような能力を涵養する教育には「複数の科目の教員間の連携が不可欠」としている。彼が担当して私も関与した京都大学総合博物館の「教育実践演習」が（未来の）教師の総合学習であったことを考えれば彼の問題意識がより具体的に見えてくるだろう。ここでは「対話」や「協力」の重要性が強調されている。

次ページに示した大野の学習モデルを見ると「つたえあう」という対話を重要な要素として配置されていることが分かる。つまり、実験や観察によつて確かめられた真理は対話によつて「わかる」の次元へと昇華されていくのである。大野において真理は確かめられ、そして言葉によつて証明されることで確固たるものへとなるのである。このように大野においては「対話」が重視されている。



探究活動では、課題を見つけることにはじまり、かんがえ、つたえあい、わかるという流れが繰り返えされる。この活動を通じて、世界について深く知り、自身について強い信頼を得、また聴く、話すを通じて他者の考えを尊重する態度も養える。こうして、探究活動は子ども達の全人的な「生きる力」を育んでゆく。

「対話」から紡ぎだされた物語

企画書のリライトのために、大野から聞き取った初期構想は、社会教育施設としての大学博物館と学校教育の現場との対話の中で展示が出来上がっていくものであった。

確かにこの展示が生み出される以前、そのような構想は時期尚早であった。プログラムもノウハウも私たちに十分とは言えなかった。探究活動をどのように考えればいいのかも、まだ不明瞭であった。

しかし、今、本書の第一部に示されたモデルが、第二部に示された現場の探究活動を見つめる観点が、そして、第三部では実際に学校現場との協同での様々な試みが示された。ここで示されたものが絶対的どこにでも適応可能なものとは思えない。しかし、これは一つの見識なのである。それは多様な声の集まり、様々な事例と考えの交流、すなわち、「対話」から紡ぎだされた、いびつな一つの語りである。

そして、「学びの海への船出」

このような見識が示された現在、大野の構想はもはや夢物語ではなく、一つの実感を伴った構想として浮かび上がる。それは一つの展示を作り上げることだけではなく、本書で示したような、事実在即した真理を見極める人々の生き方と、真理を語る人々の交流の中でそれらの生が出会う場所として

の「生涯学習ファーム」として顕在化されることになる。

本書、そして特別展のタイトルとして掲げられた「学びの海」はかくして切り拓かれる。それは子どもたちのみならず、現代を生きる人々が真理をめぐって交流するダイナミックな世界である。

本書はこうして「学びの海」へと旅立つための、——子どもたちだけではなく、私たち大人、教育者、教育学者のための——準備するものであり、その「船出」を告げるものとなった。

探究活動の輝きに向けて

この特別展のタイトルは松川東小学校から展示物を預かった帰り道、長野のそば屋で大野と考えたものである。私はそのとき副題に「探究活動の輝きに向けて」と入れた。それはある歌のタイトルからとられたものである。「空を海の輝きに向けて」——というその歌にはこのようにある。

月のまなざしが　まだ残る空に／やさしい潮風が門出を告げる

この人生の青い海原に／おまえは　ただひとり帆をあげる

「荒井由実（一九七二）「空と海の輝きに向けて」（作詞作曲、荒井。デビューシングル「返事はいらない」のB面。作品コード　045-1495-5）」

探究活動は未だ色あせぬ未開の海である。教育研究としてもこの分野を専門に、教科を横断して行っている人はほとんどいない。だからこそ、この展示に関わりたがる教育研究者は本書で名前が挙がっている人物以外、いなかった。私にはこの展示が、そして、本書が、手放しで評価されるとは到底、思えない。

呼び合う世界で空と海が出会う／おまえは歌になり流れていく

本書が向かう先には「社会教育」と「学校教育」が出会い、両者の声が響き合う、大野が構想したあの「学びの海」が広がる。そこには一つの物語（ドラマ）が、一つの歌が生まれるだろう。

遠い波の彼方に金色の光がある／永遠の輝きに命のかじをとろう

大いなる海原に一つの命が向かう。その旅路を人は、ずんぐりむっくりしたあの行政用語で呼ぶのだ。――「生涯学習」と。